

〈巡検の記録〉

富士山麓巡検 (浅井先生)

昭和46年7月2日～4日

7月2日1時、小雨の中をバスは出発。学生セミナーを兼ねての巡検だ。この巡検のために私達は行程に合わせて、

- ① 上野原・河岸段丘
- ② 富士山の地質
- ③ 剣丸尾・溶岩トンネル
- ④ 富士山の水理・富士五湖
- ⑤ わさび・養鱒場
- ⑥ 白糸の滝
- ⑦ 田子の浦港

のような班に分けて1ヶ月前から、休み時間、放課後を利用して下調べをしてきた。出発の日の朝3時間をかけて、各班ごとに下調べの発表をして、この巡検の見どころ、とらえどころを話し合った。

バスは中央高速に入り、一路富士山に向かった。さっそく地図を広げ磁石とガイドさんの案内とで現在地を追っていく。時速100キロメートル近くで走っているのに5万分の1の地図をじきに駆け抜け、次は上野原、次は都留、次は山中湖と地形図ひろげに忙しい。

高尾山に向かっている時、浅井先生がマイクをお使いになって、高尾山の歴史的社会的意義等、昨年の巡検の成果などを話して下さったり、所々ガイドをして下さった。上野原では鶴川と中央高速との接点で見られた河岸段丘が6段か7段かで私達は大騒ぎ。皆忙しく左右の車窓をのび上がって見ている。

800年の大噴火の時流れた猿橋溶岩流の上を渡った時や、剣丸尾などの溶岩流の上に立っている時など、噴火当時の光景を思い浮かべると、自然の脅威を感じた。

4時。今夜の宿泊地富士スバルランド(標高1,000m)に到着。夕食後から9時過ぎまで、その日の巡検のまとめをしたり、各班の発表を補った。2日目の夜など、眠い目をこすりこすり11時過ぎまで皆で勉強した時は、巡検が単なる旅行ではなく学習の場なのだ、と身にしみて感じた。

でもその晩、学習が終わった後、先生を囲んでのコンパは、仕事をしたあとの解放とでもいうかとも楽しい思い出。

2日目の早朝に、森林公園の中にある新しく発見された溶岩トンネルを、地理学科の巡検というので特別に許可をいただいて調査した。かがんで入るような小さな溶岩トンネルだったが、まだ人に踏み荒らされていないので、豆学者になったつもりで皆熱心に調査。その日は富士山麓を西回りに南下して、白糸の滝まで行った。途中、富士風穴・本栖湖・養鱒場・わさび田に立ち寄り、この日の収穫は大きかった。

私は富士の水理を調べていたので、富士五湖や浅間神社の湧玉池・白糸の滝等のように湧水と違ってこんこんとあふれ出すところを見ると、なんともいえぬ大きな気持ちになった。この巨大な貯水地富士山。

3日目。今回の巡検の山場、白糸の滝における徴気候観測だ。アスマンの通風温度計片手に、私達は持ち場に散らばって、さっそく観測開始。あいにく日曜日と重なり観光客で混み合っただけでやりにくかった。発煙筒をたいて滝つぼの中における空気の流れを観測した。観測結果も理論づけられたのでとても嬉しかった。

午後最後の目的地、田子の浦港に向かった。富士宮から歩くこと1時間半、潤井川の河口での鼻と目をつき刺すような刺激臭は想像以上のものだった。14キロメートル上流では鮎も泳いでいた清流が、海に行きつくころの姿には情けなくなった。それと同時に平気で汚す人間に怒りを感じた。そこにいる限界を感じ「死の町」を早々に退散。富士のきれいな空気にホッとす思いであった。

このようにして重いリュックをしょっての巡検は無事終わった。心残りだったのは、この巡検に富士が一度も顔を見せてくれなかったことだ。富士山麓にいながら、それを実感として味わえず、うらめしげに磁石片手にそこにあるであろう富士山を見上げたのを覚えている。

12月に入った今、真白な雪をいただいて遠くに浮かぶ富士は、巡検前よりも私に身近なものになっている。
(1年 石川文子)

天竜川流域巡検 (浅海先生)

昭和46年10月18日～20日

第1日 6:50新宿発アルプス1号に乗る。10:35岡谷着。くもり空が途中から晴れてきた。